

---

# 真・恋姫†無双 OROCHI

フォン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真・恋姫十無双 OROCHI

### 【Zコード】

N7044Y

### 【作者名】

フオン

### 【あらすじ】

初めて小説書きます…

一刀と及川の親友であるオリ主が遠呂智になつて恋姫世界で頑張る  
お話

主人公陣営には恋姫で登場しなかつた史実の有名な将をガンガン入  
れていきます  
めざせ、完結！

海藤遊星（前書き）

本文書くより投稿することの方がくせ者

この小説には  
オリジナル要素  
少しのキャラ崩壊  
が含まれます

「」注意ください

「…………はあ」

俺は海藤遊星。聖フランチエスカ学園に通つてゐるただの学生や  
親友の一刀みたいにエロゲにいそなうなイケメンな面はしてねーし  
及川みたいにキャラが濃い訳でもネエ

俺が勝てんのは学力と身長だけだ

……ルックスエ…

でだ。

今俺はガキににらまれてビビッてるのさ＝  
なんつーか、ガキの周りの気が全然ちげえ  
めんどくせえ…

「まあ、いいだろつ…」

ガキが呟いたのと同時に俺の視界は何も見えなくなつたんだ…

ゆづせいは  
めのまえが  
まづくらになつた

……レポートしてねえ…

「…………起きろっー！」

ぐはっ！

「起きたな（物理）」

「いいなあ……左慈に蹴られるなんて……」

腹部に痛みを孕みながら身体を起こす俺

目の前にはあの時のガキ  
それでもう一人誰かいるな……

とりあえず

「……どこだ？」

## 邂逅、左慈と千吉

やあやあ、遊星だよ

いま俺がいるのは

地面が透明、空は不思議な色合いでして、この世界とも違ひがある所か

…ゼロ時間かよ…

まあ、それよりもだ

「俺は左慈。そして」こいつが「左慈の永遠の恋ひであつて」千吉  
だ

美しい裏拳を決めながら自己紹介をした左慈

えと…俺は海藤遊星

とりあえず自己紹介

「遊星、貴様、北郷一刀は知ってるな？」

「ああ、一刀は俺の親友だてか、待ってくれ！」

「ここはどこだ？あんたら左慈と千吉って言つたよな？それって三国志のあのか？いやいやいや…まさかゲームや小説でもあるまいし…」

「「つるさいやつだな……」

左慈がぼやく

「まあまあ左慈。遊星はなかなか頭がきれる人間です。私が言葉で納得させますから、殴るのは私だけにしてください」

そう言うと千吉が俺の田の前に飛んできた  
蹴られたのか…

「ハア 左慈つたら激しいんですから。さて遊星、あなたの質問に答えましょう。私達はあの左慈と千吉です。ただし、三國志のパラレルワールドで、のですがね。」

パラレルワールド！？

たしか平行世界だかinfの世界のことだよな…

「話を続けますね。そのパラレル三國志に北郷一刀がイレギュラーとして入ってしまったのですよ

それによって史実と違う結末で魏が統一してしまったのですよ。」

一刀なにやつてんだ…

史実と違う結末…？

「例を挙げれば、赤壁の戦いで曹操が負けず、そのまま天下統一します。」

は？

赤壁つちやあ映画にもなる大決戦だよな  
史実と、違う未来か

一刀のせいでの

「や」で貴方に、亞んだ歴史を戻して欲しいのです。分かりますか？」

なるほど、だから俺は「」にいると

「俺に！？どうすりやいいんだ！仮に方法あっても、俺なんかが出来るわけないって！」

正直、こういう異世界召喚モノは大好きだけど、自分が主人公でだなんて、無理に決まってる。

「わかつてますよ。あなたに乱世を生き抜く力がない」とぐらい。北郷一刀は主人公補正なるもので運良く曹操に助けられ、常に周りには彼を慕う人物に溢れていました。が、貴方は未知数。どうなるかは私達も知りません。なので貴方に力をあげましょ。」

「…………」

俺は黙ってしまった。

俺の中の好奇心が今爆発している。アドレナリンが湧き出でている。オラ、ワクワクしてきたぞ！

「」の話、受けますよね？

「…………受けれるよ」

俺はそう言った

信じられない話だがな

「よかつた。あなたが受け入れるまで帰さないつもりでしたから。

私としても左慈との愛の空間に遊星がいても邪魔でして。それでは左慈、仕上げdあべしつ！」

「死ねつ！」

また千吉が飛んでいった

「さて遊星、行くからには相応の覚悟が必要だが、分かつてるか？」

「うん…これから行くのは血の臭いがする見知らぬ世界

「分かつているッ！」

力強く言った

「ふん…その覚悟、本物であるかどうか…確かめさせてもうつぞ」

俺の目の前に青竜刀が現れた！

ええええええええ

これが仙術かよ

チート乙

そして目の前に1人の兵士  
そいつを、倒してみる

左慈はそう言ったんだ…

「ま、いつなるか…」

兵士が剣を振りかざし突撃してきた！

青竜刀を手に取る。

ひんやりとした金属の感触ひひ…生々しい

「けどれりー！」

兵士の剣が振りおろされる

見切つたア！

身体を右へ反らし

切り裂く！

青竜刀が兵士の顔を薙ぐ

兵士はそのまま倒れた

「ふう」

チユートリアルでの戦闘でなんか、負けてられねーっつの

「ほう、お前人を殺すことに躊躇しないのか」

左慈が少し驚いた様子で口を開く

「ん？ま、いい気分じゃあねーが、そこ」とこは割りきらねーとやつてらんねーだろ？一刀は剣を持たなかつたのか？」

戦国の世で剣をもたないなんてそんなわけ…

「あいつは直接人を殺めたことはない」

「竹刀なら黄巾のやつらに向けましたね。」

于吉おかえり…

一刀は優しいから流石だといいたいが…

甘いぞ一刀！

リバースカードをオープンしそうだ

「于吉、遊星なら能力をやつても大丈夫か」「そうですね。遊星なら大丈夫でしょう。」

お？ついにか！？

キター（。。！）

「遊星、あなたに能力を差し上げましょう。どれがいいですか？」

？公孫淵

？金旋

？淳于瓊

？曹爽

うわあ…

凡愚しかいねええええええええええええ  
つか能力をくれるんじゃなくて憑依じゃねーか…

「嫌だつー同馬懿に「滅せ…」とかいわれたくない！  
金旋…はまあ性格俺ならなんとかなる…かもじやなくて、地味すぎ  
る！

鳥巣で焼かれたくなーい…つかさせねえー袁紹に訴えてやるーーあ、  
でも袁紹って優柔不斷なんだつけ…  
曹爽とかもう赤壁より全然後じやねーかーかー何より凡愚だらあーつー…

(その時遊星に電流走る)

「そうだ遠町智にしてくれー今考えついたー！」

「今の選択肢は[冗談ですよ。マジレス]www

イラッ ( < ^ # )

「とまあ、遠町智ですか？いいですけど、大変ですよ？では…」  
「ふうひー…」

左慈と于吉が俺に術をかけているのだろう。体が青く燃えだした。  
なにこれこわい

青い炎が体を燃やしきべしたと思つたら、

「つかー？」

体から力が湧いてくる。

炎が消えてゆくのと同時に俺の体に鎧、兜、脛あてなどが現れる。すべての炎が消えた。  
そつと口を開く。

「すつづえ…」

俺はまさしく遠町智になつっていた。俺自身が変わつてるのは、氣といふが、体から感じる力だけか。肌もグレーになつてないし。于吉が鏡を出した。お！ オッドアイになつてる！ 俺カツコイイ！

足元には遠町智の武器「死神鎌」「焦喰」が置かれている。

「さて、あとは乱世であなたが歴史を正せばよいだけです。」

「おひ。具体的には何をすればいいんだ？」

「そんなの決まつてる。」

左慈がだるそつて言つ

「北郷一刀を…消せ」

## 出会いは殺伐と（前書き）

よく見たら私かなり文章すくないです  
次からたくさん生産します...

## 出金いは殺伐と

ま、じうなる可能性はわかつちやあいたが…

「……分かつたよ」

「ならもう行け。千吉」

「はい、左慈」

千吉が術を唱えた

「いいですか？しつかり北郷一刀を消すのですよ！わかりましたね！」

「千吉、一刀に恨みでもあんのか？妙に感情的だな」

俺がなんとなく問う

「ええ！あの泥棒猫はつ！左慈と2人きりで一夜中に外でキャツキヤウフフとイチャついていた（ぐふつー）」

「もう死ね！」

「……せえせえ……左慈もつ！私に見せたことのない顔でつ！ぐふつ！あの男とつ！一夜を過ごしたと思うとつ！あつ！左慈そこはダメですつてば……ああ……」

「千吉…お前のこと、忘れないぜ…」そこで俺は謎の空間から姿を消した。

ぶわりと風を吹かせながら俺は着地した

どうやら本物の大地にきたらしい。ここが後漢の中国なのか

「貴様いま何をした！」

突然後ろから声をかけられた

「ん？」

振り向くとそこには剣を構えたすごいべっぴんさんが。ほえ〜中国にはこないな美人があるべか…

剣士だからだろう、ブラウンの髪はまとめられていて、おろしたらまた綺麗だろーなあ

鎧とドレスを合わせたようなものを身に付けていて、手にもつ剣か  
らは…あんまりいいオーラはないな?なまくらよりはという感じ

どつかでみたことあるような…

「沈黙か、それでもよい、すぐに切り捨ててやる…ハッ！」

女剣士が突っ込んでくる…いい気迫だ。だがあなたには何より

ガギイン！

「なつ！」

容易く受け止めた俺に驚いたのか、表情が変わる。かわいい。

速さがたりない！

そのまま剣を弾く

キン

「ふつ！」

かわいい剣士は俺から距離をとった

「ああつー。トランザムも出来るよつとしてつて言つたの忘れてた！」

「は？」

再び困惑する戦乙女（仮）さん。美しい

「私は遠呂智。この国を変えに降臨せし魔王」

遠呂智様つぽく言ってみる

「降臨？もしや天の御遣いか？いや、天より来たのであれば死神鎌なぞ持つはずがない。やはり妖術で人をたぶらかす妖魔なのだろう！」こじで成敗する！「こいつ脳筋かwww

「貴様…私を笑つたな！？生きて帰れると思つなよ！」

え？表情には出してないのになぜ分かつたし！？ポーカーフェイスの神（自称）の俺が読まる時は…まさか！？ニユータイプか！

「はあつ！瞬迅剣！」

んおお！？

強烈な突きが俺のいた場所を貫く。なるほど、魔神剣より瞬迅剣派か

「次はこいつの番だな！」

鎌を振りかざし…

「チャージー！」

そのまま地面に打ち付ける！

地面に衝撃波が走りそのままかわいい娘を吹き飛ばした！

嫁にしたい娘（もはや誰だ）は木にぶつかってそのまま動かなくなつた…

「ああっ！ やりすぎたか！？」

どうやら身体能力も爆発的に高まつてゐみたいだな。考えてみれば瞬迅剣を俺がよけられるはずがないし。

よしまずは嫁（違います）を休ませてあげよつ。

はつ！ これは！

宿まで…

？おんぶしていく

？お姫様だつこ

？引ぎずる

？無視する

うおおつ！

また鬼畜な選択肢があつ！ お姫様だつこだと…？ 俺を萌え殺す気か！

？？は鬼か！ サドの魂は俺にはない！

「…おんぶだな…」

よこしまと

良かった、そんなに座我せまなせり…ん?

なんとこいりとでしょり

「胸…ないな」

## 拠点フェイズ 程遠志（大嘘）（前書き）

遊星遠呂智の能力説明

チャージ攻撃の属性攻撃は莫大な「氣」を使って行う

その際、感情に属性が左右され、氣を込めるほど威力が強く、強く願う程属性威力が上がる

「殺氣」

これをこめないとひとを殺せない。

「情熱」

炎の属性が出る。

## 拠点フェイズ 程遠志（大嘘）

「よし、着いた！」

名も知らぬ村に到着。つと  
ちなみに今の俺の格好はフランチエスカの制服。鎧とか、指ぱしち  
んで消えるんだぜ？ かつこーーーしかし人目は盗んで装備しないと  
な…

宿にチェックして一部屋借りる。宿泊代なんてもってないから、明  
日からここでバイトだな。

「汚ねえ部屋だなあ」

空気がどんよりしていて、部屋全体が黒っぽい…

早速店から道具を借りてお掃除開始  
かわいい剣士はベッドメイクした寝台へ  
あ、なんかいいにおいもする… ハアハア  
え？ いやいや、変態だなんて失敬な。紳士のたしなみですよ？ TA  
S I N A M I ですつてば

ここから団布のテーマ

いやああああ！

ゴ…ゴキブリだあああああ！

…遠田智、士気低下… -

くつ…まさかここで奇襲とは… しかしここで終わる俺ではない！

パチン！

死神鎌「焦喚」をだす  
R1無双消費必殺技！

「樂にしてやるつー！」

ド「ゴオオオオオン！」

分身して焦喚を盛大にふりおろすだけという地味な技だが、なかなか威力あるな…

奇跡的にも床に穴が空かなかつた…

はつー呂布…じゃなくてゴキブリは…  
しつかり死んでいた。

篇でささつと外に出してつと

あとは蜘蛛とかいたけど気にしない  
蜘蛛はかわいいだろ！いい加減にしろー！

そして数刻後

なんとこうことでし（ゝゝ

美しく生まれ変わった宿の一部屋がそこにありました。

そんなとき女将さんが料理を持ってきてくれた。ナイスタイミング。

女将さんはなにやら凄く驚いた様子で部屋を見渡し、「あなたこそ、  
真の三國無双よー（掃除に關して）」

と言つてすたすた行つてしまつた。

「うう…

んお？姫の田覚めかな？

「おはようござります。つても毎日ですけどね。」

「えと…あなたは…はつ…妖術使い！ふんつ…」

ひでぶつ…

いい右ストレート…こいつ…助けてやつたのに一方的に話すすめやがつて…痛い…いやいや、こひは冷静に、超クールだよ俺！

「待つてくれ！俺はあなたに危害をくわえたりしない！むしろ味方だ！まずは俺の話を聞いてくれ！」

「妖術使いのこいつとなんか信じられるか！私になにか術をかけたりしていいだろうな！」

ありやりや…

どうしたもんか…ん？外が騒がしいね。

DOONそうな男「おうおう、うまそうな饅頭だな。ほり寄越せよ！」

饅頭屋のおひちやん「あのその…代金…」

チビ「ああん？俺らから金を取るつてかあ？」いつが見えねーのか  
？おー」「

ギャリン！

あのチビまさか抜刀するとは…おっちゃん剣見て青くなつてるし…  
つーか饅頭つて孔明が作ったもんだよな？なんであんだろ…

デブ「おうおう、道をあけるんだな！程遠志様のお通りなんだな！」

ん？程遠志？黄巾賊の将で関羽だか張飛だかに一発で沈んだザコキ  
ヤラじやん？あの先頭の少し豪華な装飾したおっさんか

程遠志「野郎ども！」の町も食らひ死へせ！金を奪え、ガキを殺せ、  
女をさらえ…うひゃひゃひゃひゃひゃ…！」

おつとい、まさかあのまわりに百人くらいいる黄色い布まいてるやつ  
は…

「黄巾賊かつ！」

「何！？黄巾だと！？」

「俺の馬鹿！なぜもつと早く気付けなかつたんだ！」

部屋から飛び出し、指をならじて遠呂智になる

程遠志「さあ！行けえ！」

黄巾賊「いええええ！」

間に合え！

死者がでるまえに！  
うおお！

「ダッシュ攻撃！」

「ぎゃああ！」

まずは1人！

「チャージー！消し飛べ！」

「うわあああ！」

まとめて何人が吹き飛ばす。殺氣をこめて撃つたからまともにくら  
えば内臓が破裂したり、腕や足がつかいものにならないくらいの衝  
撃波は撃つたはすだ。

「この…化け物が…」

死に損ないの賊が口を開く

「化け物？…違う、俺は悪魔だ…」

ブリー、セリフを借りるぜ

「ぎゃあ！」

死に損ないが悲鳴をあげ絶命した

それを殺したのは目の前のこの少女

カウボーイな格好と頭に合わせ大きめなカウボーイハットに隠れる  
鮮やかな黄緑の髪

手には剣を持っている

「賊と戦っているのでしょうか？」

少女が聞いてきた

「ああ

「なら、手を貸しましょう。」

なんだかよくわからんが味方ゲット。

「俺は遠畠智。君は？」

「単福と呼んでください。」 こうりと少女がいった。

……徐庶さんチイース！

「わかった、単福ちゃん。俺に力を貸してくれ。」

「了解です。村に散らばった賊どもは私にお任せください。遠畠智さんは程遠志を討ち取ってくれますか？」

「なるほど、確かに頭がやられたら賊の動きも鈍るか」「そうこうことです。では参りましょー！」

「おひー！」

走り出す俺

ん？ あれは…

（――）

剣を探すのに時間をかけてしまった。

黄巾賊が群がるなか飛び出したあの妖術使いを追つてわたしも賊と戦闘を開始した

「女だあ！ いい女がいるぞ」「なかなかの上玉じゃねえか？ 胸がな  
いが」

「程遠志様！いい女がいますぜ！」

賊のゲスい視線をあびながら、私はそいつらを斬り伏せるべく剣を構える

「はあー！」

斬り込む！廻き払う！突き貫く！

また1人1人と賊を減らしてゆく…が

「はあ…はあ…」

きりがない…10はとっくに越していのはずだが…

程遠志「ひやひや w! もつ終わりか? ピコンー・ザシユ!

「ぐつ！」

矢を射たれたか！不覚…！

「隙ありイ！」

ギャリン！

しまった！剣を弾かれ、黄巾賊の足元に転がつていった。

「おい、こいつ気絶させて持つて帰るぞ！」

「うへへ w 村にきたかいがかつたつてもんどうさあ

……何をしているんだ私は…

私は両親を黄巾賊に殺され、復讐を生き甲斐に剣をとつた。町一番の剣士になった。なのに…何故黄巾賊ごときに負ける！何もかもに絶望した。

「ひまでか…

「どうしてそこで諦めるんだそこで（。。。）ー！」

ド「オオン！」

黄巾賊が吹き飛んでいった！

「だめだめだめだめ諦めたら…だから…そ…」

妖術…使い…！

「もつと…熱くなれよおおおお…」

「うわあああ！アチいい！なんで炎がでるんだあ！  
私を囲んでいた賊が燃えていた…  
どうなつてゐるかわからんが…

「味方…なのか？」

妖術使いを見て呟いた。

~~~~~さつきの暴力剣士が黄巾の奴らに囲まれ  
てる。！まずい、黄巾<sub>もじん</sub>兵<sub>へい</sub>が暴力女<sub>もじんじょ</sub>を狙つてやがる！

ビュン！

「ぐつ…」

ああ！右足に思いつきり矢が刺さつた！

「隙アリイ！」

ギイン！

程遠志の一撃が暴力女の剣を弾いた  
あーあ…

ええ！表情変わりすぎだろ！急にぐらこ顔になりやがって……これじゃあ好きにしてくださること言つてるよ！つなもんだろ！

助ける義理はない……が女の子のピンチを無視つてのは綺麗じゃねーよな！

「うううまでか……」

はあ？諦めるんか？

「どうしてやうで諦めるんだぞ！」（。。。。）

「アホォン！」

黄巾賊が吹き飛んでいった！

「だめだめだめだめ諦めたらーだからー」（。。。。）

「情熱」の氣を混ぜて打つ！

「もつとー熱くなれよおおおおー！」

「うわあああー！アチーーーなんで炎がでるんだあー！」

決まった…（どや顔）

「味方…なのか？」

暴力女が呟いた

はあ～

「だから、やうやくただろ！ひーから、黄巾潰すから手を貸せよ。足

大丈夫か?」女の剣を拾つて渡す。

「ああ…これくらいなんともない。」

「なら、行こうぜ。そろそろ飽きたぜ…程遠志イ！5秒で消してやる。」

程遠志「ひい…」

「弱者は無用…消えよ…」

ザシユツ…

程遠志をひとつりで倒した。

「すごい…」

暴力女が驚いている。そんなにすごいかな?

あとはこれを賊に知らせれば単福ちゃんの策はほぼ成功つと

聞けい！黄巾賊ども！

「敵将、討ち取つた！」

## 遊星、LITTLE STAR (遊星や)

作者は  
二口歎なので  
いろいろ  
ネタを混ぜて執筆します  
わからないうめんなさい無視してください。

「悲壯」

氷の属性をつける

「驚愕」

雷の属性をつける

## 遊星、仁王立ちする

程遠志を失つた残党（といつても20人いるかどうかまで減つていった。単福ちゃん強し…）は逃げ散りはじめた。幸い、怪我人はいたものの死者は出ずにすんだっぽい。やつたぜ。

「遠呂智さん」

やあ単福ちゃん

「お疲れ。単福ちゃんのお陰で追い払えたね。」

「私は何も。遠呂智さん」そ、一騎当千の猛者とお見受けしました

か…かわいい！暴力女といい、美少女が多すぎる…古代中国おそるべし…

村人のみんなも安堵の表情を浮かべている。俺と単福ちゃんにお礼までしてくれた。人助けはするもんだねー

そんなほのぼのしていると「大変だーー皆逃げるーー」という村人Aの叫び声

「どうしましたか？」

「ああ！助けてくれた嬢ちゃんか！黄巾の軍団がこっちにきてんだー…さつきの数なんかの比ぢやねえ！はやく逃げるぞー！」

「…しまった！近くに黄巾の拠点があつたのかー！」

程遠志なんて（黄巾の中では）有名な将だ。少人数でぶらぶら放浪しているなんてまず無いよな。

「…」の近くに董卓という方が治めている都があります。そこまで逃げきりましょーう。

単福ちゃんが提案する

董卓…正史では都を治めてからの彼の評判はあまりいいものではないけど…

ゲームみたいに

「クズどもなぞ受け入れるわけないじゃー全員、死刑じゃあ…」とか

「ほほう、単福とやら、なかなか将来が楽しみな美貌じゃのう…ワシに仕えるなら、受け入れてやつてもよござー…」

みたいなことになつたらやだなあ

「董卓つて、大丈夫か?」

「大丈夫です。天下を治める器ではありませんが、善政をしき、家臣に恵まれ、また董卓様自身、心の強い方であります。きっと私達を受け入れてくれますよ。」

あらあら、単福ちゃんがそう言つなら大丈夫か

「なら、俺達が誘導してあげないとな。殿は俺にまかせろつて」「お一人ですか!? 危険過ぎます! セめて村人の中から義勇を募つても…」

「村の人を逃がすのに、なんでわざわざ戦場に立たすのさ? 大丈夫。本当にやばかつたら逃げるから、それまでに単福ちゃんと皆が董卓んどこに着けばいい。俺は単福ちゃんを信じてる。」

「…………『めんなさい』」

「謝る必要なんかないよ。さあ、行つた行つた」

満面の笑みを浮かべておどけて言つ

あれ？これ死亡フラグ立つたか？

村人A「守りたい、この笑顔」

村人A 黙れW

さて、遠呂智モードになるか

「聞け！黄巾の軍団がここに迫つてゐる。貴様ら弱き者は去れ！我が時間を稼いでいる間、董卓の元に逃げ続けよーここに単福が案内しよう。」

「ぐり、と単福ちゃんが頷く

慌ただしくなる村人たち

そして少しの貯金とふくれた風呂敷包みを持って単福ちゃんと村を出ていった。

「お前は逃げないのか？暴力女」

「その呼び方は止める！」「いや、だつてお前の名前知らんし……」

「そ…そ…うか…私は丁奉。字は承淵だ。さつきは妖術使いなんて言つてすまない。あと、助けてくれて感謝している。」

丁奉オ！？丁奉と言えば、孫權の代に活躍して、山田…じゃなくて張遼を倒したりして孫吳の数々の戦で活躍した猛将じゃねえか！さつきの徐庶ちゃんといい、なぜか女の子になつてるし！パラレルワールドG！

「ああ、気にするな。そこより話しも聞かずに殴つたことを謝罪しろ…んで、逃げないのか？ここは危険だぞ？」

「……面倒ない……」

本当に申し訳なさそうな丁奉

「私は逃げない！あなたと共に戦わせてくれないか！もひつ黄巾の奴らに負けたくない！」

どうしてこうなった

「丁奉。君の勇気は立派だ。けど今回は一瞬で命を落としておかしくないほど、

の三つ

波才と韓遂か…有名所が来たねえ…  
氣を付けるべきは廖化か。

黄巾党壊滅後、劉備に仕えて、黄巾の乱から蜀滅亡までクソみたいに長生きした蜀の重臣。姜維の次ぐらいまでの地位にまで上り詰めたんだつけ？

ま、遠田智には敵わないだろ

「丁奉」

「なんでしょう」

「俺らは黄巾党を倒すんじゃ ない。村人を守る為に戦うんだ。攻撃は必要ない。時間を稼ぐことを最優先にね」

「…………」

本当は黄巾の奴らをぶつ飛ばしたいのだつ。でも今は我慢してく  
れ。今は耐える時だ

「丁奉」

「…………」

黄巾の軍団が村に入ってきた

多分戦闘にいるいかにもつてやつが波才と韓遂、そして廖化だな

「我が名は韓遂！お前か？程遠志の旦那を倒したつて奴は？」

「いかにも。この遠呂智が切り捨てた。」

「！間違いなく、程遠志殿ですね……私の名は波才！張角ちゃんと程  
ぽいっと程遠志の首を投げてやる

遠志殿の為、あなたを倒します！」

ヲタクな空気をだすポツチャリさんが波才か…俺じゃなくて曹操と  
やれよ…

「あなた

と丁奉

ああ「

そういうや丁奉には名乗つてなかつたな。

「皆さん、頑張つてついてきてくださいー!諦めてはダメですよー!」

民の躊躇の足が思つたよりも遅い… 呼馬を董卓のやうく出しだす、聞こゆかな

遠呂智さん……あの人は間違いなく王になるべきお人だ。私は大陸を旅した。

幽州の公孫贊さん…勢力はあまり強くないけど、義に篤くいい人だつた。けど、趙雲さんという人以外は人に恵まれておらず、なにより王の器は持つていなかつた。

冀州の袁紹さん…名門の出で勢力は一番だと思つ。顏良さん、文醜さん、張郃さん、荀イクさんを初め、いい家臣をたくさんお持ちでした。けど、袁紹さんは暗愚だった。あれは子供と同じです。

揚州の孫堅さん…あの人は王の素質を持った人でした。周瑜さんと、黄蓋さんも優れた人物でした。優秀すぎて、私の居場所がないと言

いますが、知をもてますことになりそつで、偏見ですが、お断りです。

益州の劉障さん…あの人はその…小さい女の子が趣味みたいで、私の貞操の危機が訪れましたが、ちょうどその時嚴顔さんに助けて頂いて、すぐに去りました…

寿春の袁術さん…袁のつへ人は皆凡愚なんでしょうか…?

そして、陳留の曹操さん…霸道を行く王の器の持ち主。家臣の夏候姉妹も実力は確か。でも…霸道に私は賛成できない。曹操さんも…あの…女の子が趣味…みたいな噂を聞いて…ふわわ／／その他、張繡さん、董卓さん、劉表さん等を見て回ったけど、私の気持ちは揺らがなかつた。

諦めて、朱里ちゃん、雛里ちゃんと劉備さんとこ行けば良かつた…

そんなどき、遠田智也さんと会つたんだ。

敵に立ち向かう勇気、民を守る義心、仲間に耳を傾ける気配り、一騎当千の武の持ち主。あの人…この乱世に立つなら、私はこの身を捧げて力をつくすわ。

だから…

「死なないでください…遠田智也さん…」

## 遊星、ハサウエイ立候する（後書き）

丁奉のモデルはFA E/NEROのセイバーさんです

徐庶のモデルは強いていえばポケモンのカウガールでしょうか。

逃げ戦つて誰か仁王立ちした方が成功あるよね（前編）

よくあけてすみません

賛同の図は「さくらんぼ」が交換ドミナのドリの時にします

逃亡戦つて誰か仁王立ちした方が成功するよね

「ハアツ！」

「悲壯」を混ぜた氣弾で敵を凍らせる。

「真空破斬！」

大きな横の薙ぎ払いが氷のオブジェと化した黃巾党を砕いてゆく  
死体に情熱の氣弾をたてて、埋まらないよう灰にしてゆく  
死体の焼ける酷いにおいが黃巾賊の士気を下げる  
波才なんかはゲロ吐いてた。そのゲロつてる間に斬り捨てたけど  
「敵将、討ち取った！」

「…波才ーーー！」

「よそ見とは、余裕だな？韓遂！」

「ぐあ…しまつ…た…」

丁奉も韓遂の肩に一撃入れたようだ。もう一撃だ！

「瞬迅剣！」

高速の突きが韓遂を貫……「ガキン！」…かなかつた。

「韓遂！お前は下がれ！お嬢さん、この廖化が相手をしよう！」

「チツ！貴様もすぐに切り捨ててやる！」

おい丁奉…どつちが悪者かわかんねーぞ…

「ジャンプチャージ！」

「ぐああああ！」

あー、遠呂智つええwww

見ろ、人がゴミのようだ！フハハハハハ！

丁奉もまだまだいけそうだ。足大丈夫かなあ…

村を出発してどのくらいたつただろうつ…遠呂智さん…もうとっくに戦つてゐるんだろうな…ううん！大丈夫、遠呂智さんは死はない！

「あれ？あの旗は……」

前から迫る「咄」と書いてある深紅の旗につづく軍  
そしてみるみるうちに私たちの前まで来た  
先頭を走っていた2人が前に出てきた。

1人は赤い髪で、身長が高く、眠そうな目をしている。もう一人は私と変わらないくらいの背に翡翠色の髪をした子

「あなた方が、黄巾の集團から逃げている者たちですか？」

さんの軍ですか!?

月は  
頼まれた  
たから  
黄巾の奴を倒す

「黄」の重複が「らう」のは「二六」の前の「万」が「二

「黄巾の軍隊がいるのはここから南の方です！そこで足止めをしてくれてる人がいて…お願いします！速く助けてください！」

「

「はいなのです！ 恋殿、黄巾の奴らなぞ、ギタギタにしてきてくだ

七〇九

そういうて恋、と呼ばれた人は軍を率いて遠呂智さんの所に行つた

「都まで陳宮隊が護衛するのです！さあ、いきますぞ！」

鎌で首を一気に薙ぎ払う

「そろそろ死ぬよー！バケモノ俺の後ろに立ーんじゃねえええ！」

一命が惜しくば引け！弱者に用はない！」

「何?」今まできて何を退けと意見する!」

「ふつ…周りをよく見るがいい。次の一撃で、貴様を葬つてくれる」  
丁奉がそう言つた

廖化の周りにはもはや兵と呼べる者はほとんどおらず、武器を捨て逃げ始める者、腰を抜かし座りこむ者、死体と丁奉と俺しかいない。

「…ルウ一・ミルニヘルニ・」

廖化が旨に号令する

一 退却だあ！逃げろおお！」

黄巾の奴らが次々去つていった

「今日の俺は紳士的だ……運が良かつたな……」

「…………」

ふー

こつじて、遠畠智は勝利したのであつた。（勝利BGM）つてなー。

ともかく、勝てて良かったなあー

つか俺TUEEEー！

まさか時間稼ぐまでも撃退できるなんてね。

遠畠智様万歳だな

「やつたな丁奉、お疲れ様。君も強いじゃないか！少し見直したぜ。」

「

「……自分でも信じられません、勝つたなんて……」

「ああ、この勝利、この村の皆の命を救つたんだ。自慢できる」と  
だぞ。でも、流石に疲れたな……少し休んでから俺は行くよ……」

「あの……遠畠智？殿

「何で疑問型なんだよ……遠畠智であつてるべ

「その……一つお願いが……あるのですが……（もじもじ）

「ぐはあー！

可愛いー！

頬に赤みをさして言いにくそうにもじもじするな…  
すごく可愛い……戦いで疲れた心が癒えていく…

「つかせ ぱつぐんだ！」

「あ、ああ、んでじりしたの〜、つづ可憐〜…」  
やばい、萌え死ぬ…

「私を、弟子にしてください〜。」

「あ？」

「何何何？」

俺の脳のスペックではオーバーヒートしてしまはず...

「駄目… でしょつか？」

「あああ！」

「そんな悲しい顔をしないでください

「なんで… いきなりそんなことを？」

やつと出てきた言葉がこれだよ

「あの… あなたはお強いですし、私のことを気にかけてくださいた  
り… 尊敬できる殿方といいますか… お慕いしてますと言いますか…」

ん？

今告白された気がしたけど、んなわけないよね  
そんなエロゲみたいなこと一刀でもあるまいしね

「とにかく、私はあなたについていたく思います…お願いします

「またお側におこしてください...」

いやあ、参ったな...

現代での女の子と会話なんて小学生からないし... 嬉しそうちゃあ嬉しけどわ

「...好きにしなさいな」

うわ...俺素っ気ないなー

せっかくフラグっぽいの立つたのに...

「あいがとうござまーー私の真名は綾ですーーこれからは綾と呼んでくださいーー」

真名...その人にとつてそれは自分そのものであり、許されずに呼んではいけない名前のこと...  
つて千吉がいつてた

「よろしく綾。俺の真名は遊星だ」

んま、遊星の名にそんな価値はないけど  
遠山綾ひで吉こにへくない?遊星つて言われた方が嬉しいしね

「真名を頂けるとは...」の丁奉、感激の極みであります、遊星様ーー

「そんなかしいまらんでもいいよ、様もいらなーってーん?あの旗  
は

そんなコントをしてくるとガバ...  
と鳴の走る音が村の後方から聞こえてくる

「まさか...新手ですか?」

「こや、違つよ綾。あの深紅の畠旗、来た方向からしてあれは董卓  
さんのどこの畠布じやないかな?」

まさか畠布が来るとは...でも少し遅かったねえ  
はつ...いかんいかん、じいであれをばばないでビリする俺...

「つよ...畠布だああああああああああああああ...」

「.....?」

あー、一度言つてみたかったのよねえ  
丁奉、そんな田で俺を見るな...

~~~~~

んで、畠布ちゃんに連れられ董卓のとこまで来た  
畠布ちゃんが「これまた可愛い女の子でたまげたね。触角萌えwww

「用...連れてきた...」

「恋殿ーー陳宮も、任務を果たしましたぞ!」

ガバッと畠布ちゃんに抱きつく幼女が一人  
へー、こいつが陳宮か

「遠田智があああああんー」「おおー単福ちゃん、おつとー」

単福ちゃんまでガバッと俺に抱きついた。ちなみに鎧は解除してあるよ。

「わだじ、遠田智ちゃんの『ビビ』が…心配で心配で…ぐすり…」

「ああ、もうそんな泣かないでいいから、大丈夫つていつたろ?でも心配してくれてありがとう。」

「ぐすり…はい」

泣いた単福ちゃんも可愛いなあ…

「畠さん、よろしいですか?」

きれいな声にまとめられ、玉座を見ると、と呼ばれた女の子がこちらに微笑んでいる

「私は董卓と申します。此度の乱、対応が遅れてしまい、申し訳ありません。」

「いいえ、董卓様の前で失礼しました。私は遠田智と申します。」

「丁奉です。」

「単福と申します。此度の援軍、ありがとうございました。」

「此度の乱について、詳しく聞かせてください。」

そうして説明してみた

「んで、遠田智と一奉がすべて倒したといふのか？」

「すべてと言うよりは追い払った感じですね」

華雄さんに答える

「大したものだな。無論、私にもできるが。後で手合わせしてくれないか？」

「私のお願ひを聞いてくれたら、手合わせしますよ」  
「?なんやお願ひって?」

「この人は山田…じゃなくて張遼さん。合戦でチートキャラクターになる人。」

「董卓様、私を配下にお加えください。必ずやお役にたつて見せます!」

一瞬驚いた顔をした董卓ちゃんだけど、すぐに微笑んで  
「はい。遠田智さん。わたしの真名は月です。これからよろしくお願ひしますね」

「私は遊星です。月様。」

「遠山智… 恋は恋。」

「遊星で…こよ。恋つてよんで…の…」

「…と頷く恋。かわいいなあ～

「ひのは張遼。真のは靈や。よりじゅひー

「陳公台なのですーねねで…ですー」

「あと、詠ちゃん… 賈闊たんがいるんですけど、今は出掛けで…  
いません。」

賈闊…二國志の中でも俺の好きなキャラの一人なんだよねえ。頭よ  
さでしょアーッ。気になつたらググつてみてね。

「…ひー、暨

「…ひして俺の董卓軍での生活が始まつた…

騎士王への道 一章（前書き）

綾の拠点フェイズです

## 騎士王への道 一章

あのあと綾と単福ちゃんも一緒に董卓軍へ仕えることになつて、2人とも俺の副将になつた。

そうそう、単福ちゃんが、実は単福つていうのは偽名で、徐庶と言う名前だつて本当にすまなそうにカミングアウトしてくれた。俺は知つてたけどさ。んで、真名も教えてくれた。麻里つていうんだ。

あと、あのあと賈栩と挨拶して、認めてもらつた。真名は詠といいいツンデレだつたw

んでその詠と協力して新しく遠呂智隊を結成した。なんとあの時の村人の大勢が入ってくれて、皆

「遠呂智さんと戦いたい」

「今度は俺たちが守る番だ！」

とか言つてくれた。

感動した。目の水門が破壊された。

んで今田は綾と遠呂智隊の訓練をしていく

綾「展開！方矢陣！」

バツ

綾「氣を付け！」

バツ

まだまだぱらぱらだけど、黄巾の奴等よりは負けないよつこしないとな

遠呂智隊といつても、そこから遠呂智親衛隊、丁奉隊、徐庶隊と分けている

遠呂智親衛隊

男：女

1：9

丁奉隊

男：女

8：2

徐庶隊

男：女

7：3

どうひつて分けたか聞きたい？聞きたいだろ？

まず徐庶隊

これは簡単。ロリコンを発掘して入れただけ  
ロリコン隊とでも言い換えようか。そいつら皆ロリコンのなんた  
るか教えてやつた。

俺「貴様らの心には常にー」徐庶隊「徐庶たんかわいいよ徐庶た  
んー。」

俺「徐庶隊の捷！いつてみろ貴様らー！」

徐庶隊「YES！ロリータNOタツチ！」

士氣の高さはピカイチだろう

次  
丁奉隊

これは義憤にかられて入った人々で結成した正真正銘の正義の軍隊。まあ、それだけじゃ数が足りないから綾に色目使つての男どもも入った。そいつらは俺がお話したから大丈夫だけだ。

最後は俺の親衛隊

まあ丁奉陽と徐庶陽の残りなんだけど

男は三人しかなくて、あと女性。これまた三人がなかなか有能で、ポツチャリと細マツチョとくそでかい巨人みたいな奴。2mは軽く越してゐるな

「おでこで俺は電流走る

卷二

ポツチャリした奴は蚊  
細マツチヨは百々目鬼  
ギュウキ

アーニーは男の名前にな

井鬼は大勢の敵をば遣はうのハペハニヤア。武器は卒奉。

とまあこんな感じ。皆には学問もして欲しいね。今度親衛隊だけで  
も塾を開こうか

「皆知っているだろうが、俺がお前たちの教官の遠呂智だ。まずはお前たちに礼を言う。遠呂智隊に入つてくれてありがとう。」

微笑みを浮かべる親衛隊。

「が、訓練とはまた話が別だ。お前たちは厳しくする俺を憎む。だが憎めばそれだけ学ぶ。逃げるのは許さん。心を強く持て。さあ、始めよっ。」

遠呂智モード！

「まずは基礎体力をつける弱者ども、槍、弓、鎧兜を武装したまま訓練所を50周だ。逃げたければ我を倒せ！」

— !? . . 廿 一 一 」

遠呂智モードになつた俺に驚いてるよつだが、すぐに皆武装し始めた俺も走るかな。

「我につづけ！」

十 綾サイド十

遊星様が親衛隊と走り始めた。私も頑張らなければ。私の隊は剣士を主体とした歩兵で出来ている。

「実践訓練だ！2人一組で打ち合え！腕に覚えがあらば私が相手になろう！」

「まつ！」

今日の訓練は終了と

1日中訓練しつづけた俺達。皆死んだ魚になつていた。

「お疲れ様です遊星様。水は入りますか?」

「ああー! ありがとう綾。」

綾が持っていた水筒を取る  
「ぐぐぐぐ…

「水ウマー、ありがとう綾」

「はい。ところで遊星様。私にも稽古をつけてくれませんか?」

「? 綾はもう強いじゃ ないか」

「いえ、遊星様のよつこなこきません。どうすれば遊星様のよつこ  
戦えますか?」

ああ、なるほど

俺の気の戦闘のことか

「気を使つんだよ綾。田の前に死んだはずの両親がいたら、どうお  
もう?」

「驚いて… 何より嬉しいです」

「だらうづ~田の前に両親を殺した黄巾がいたらどうおもう?~

「怒りに身を任せ、殺してしまつと思っています。」

「だらうづ~もし俺が死んだらどう思つ?~

「悲しいに決まっています! 自殺するかもしません!~」

「うん、ありがとう綾。その気持ちを使って炎を生み出したり、氷を出すんだ。例えば…綾が黄巾の奴等に殺されたとする。その時俺は怒りと殺意に呑まれるだろう。この気持ちで炎の想像をする。そうすると…」

ボワッ！

「炎が…」

「これは人を殺せる。そおい！」

ドゴーン！

空中になげた火炎弾が破裂して消えた。

「これを使いたいか？」

「ぐぐくと頷く綾

「よし…まずは気を感じることから始めよ。はつー…」

「！？…つー」

「今俺は綾に殺氣をぶつけている。感じるか綾？」

「…はい。とても」

「殺氣がなければ人を殺せない。ふう…」

「殺気が消えました…」

「ああ。まずは殺氣を出せるようにならう。綾。瞑想してみて。」

「十九...」

「今綾の手に俺の気を流す。それを感じるんだ。ふつ！」

「あつ！ わかります。

「！」の感覚を覚えるんだ。」

100

この間手を握つたままの俺と綾。何も知らない人が見たら勘違いしそうだ  
なんだか恥ずかしくなつてきた。

十綾サイド十

この間手を握ったままの私と遊星様。何も知らない人が見たら勘違  
いしそう。けど、悪くない気持ち。この時間がずっと続けばいいの  
に。  
……恥ずかしい//

俺は手を離した。

「さあ、集中して綾。今度は自分の中にある気を感じて。気の塊、  
氣の手を想像して手で塊を掴むんだ。」

111

「うーん……綾。いつたん上めよ。」

「はい……はあ……はあ……」

「気の練習はかなり疲れる。休憩しながらね。」

「はい。なかなか上手くいかないですね。」

「アリヤアリヤ。本来使わない能力だからね。少しづつ強くなろう。よ。んじやあもう一回。」

「遊星様…はい！」

その日から毎日綾は気の練習をした。なんと1週間で殺気をだせるようになった。センスがあったのだろう。

「じゃあ、新技覚えようか。名付けて魔神剣だ」

「はい！」

俺は剣をとる

「剣に殺氣をのせて対象にぶつけるんだ。」

わーと…英雄になりたいんだ！父さんみたいな、すーじー英雄に！

「走れ！魔神剣！」

ズバッ！

青白い気が地を走り消えた…感動するねえ

「なるほど…走れー魔神剣！」

ズバッ！

綾も出来たようだ。素晴らしい。

「やつたな綾。気の初歩は合格だ。」

「ありがとうございます遊星様！またお願ひします」

「本当にすげー綾。よしよし」

頭を撫でてやる

「遊星様…お戯れが過ぎます…／＼／＼」

真っ赤になってしまった綾。かわいいなあ

「炎とか、氷とかはもう少ししたらじよひ。まずは魔神剣を完璧にね。」

なでなで

「はー…あうわ」

今日は綾との絆が深まつたな（笑）

料理マスター徐庶 一章（前書き）

麻里の拠点フェイズです

麻里は本当に頭いい。学園内でもけつこう成績優秀だった俺だけど、井の中の蛙つてやつみ。

「 というわけで麻里にこの時代のあれこれ、物のノウハウを教えて貰いつつ必死に生きてるよ。 」

「遊星さんー！」の前の試験でしたが…

「あ！ 麻里先生。どうでした？」

「とてもよい成績です！少し難しいめに作つたのですが、良くできています。特に八門金鎖の陣の問題。全問正解です。」

まあ……それは知っていたからね……劉備に仕えた徐庶が夏侯惇や曹仁などの敷いた八門金鎖の陣を劉備に教えて勝利した徐庶屈指の名シーン。俺もそこで徐庶を好きになつた。

「今度は孫子の兵法書を読み解いていきましょう。」

うん……理解できる自信ないんだけどなあ

「遊星さんなら大丈夫です。私も頑張りますから！」

十 麻里サイド十

遊星さんに頼まれて学問を教えることになりました。今なら水鏡先生の気持ちが少しわかります。

：先生今元気かな。遊星さんのことも紹介したいな

朱里ちゃんや雛里ちゃんも元気かな…

寂しくはないんだけどね。遊星さんや綾りちゃんがいるから楽しいしさで、今日の授業に行こうかな

遊星さんは覚えが早いから教えてても楽しい…

つていつのは表面で本当は遊星さんと一緒にいたいところ気持ちが強い。

なんでだろ？一緒にいると体がポカポカして、とても気持ちいい。もつと一緒にいたいのに時間はとても速く進んでしまう。

！-そうだ！-今度お菓子を作つて遊星さんに持つて行こう。遊星さんどんなのが好みかな？

~~~~~

「今日の授業はここまでです。」

「あー先生。ありがとうございますたー

麻里の授業もかなりの回数になつてきた

兵法は難しいけど、嫌いじゃないね。麻里つていつから勉強し始めたんだろ？つか麻里つて何歳？12才くらいかな

「ねえ麻里。変なこと聞いていい？」

「？」

「麻里つて何歳？」

「！？／／／」

「あー…答えたくないならいいんだけど…失礼を承知で言つただけだから」

「あの…何でそんなことを？」

「何で…？麻里に興味があるからかな？」

「ふわわ！？」

しまつた…ふわわ状態になつてしまつたぜ…

「あー…『めんなさい』

「謝りなくていいですよ…嬉しかったですし…」

「え？なんか言つた？」

「いえ！何も！18才です

「なん…だと…？」

「合 法 口 リ …

「許せる…」

「ふえつ…」

「ふえつ…」

つい大声が…

「ああ、『めん麻里。』

「いえ…あの、遊星さん…甘いものなお好きですか？」

「甘いもの?うん、大好きだぜ!」

「私今日…遊星さんにこれ作ってきましたです…えりつわ

やつこつて小さな包みをくれた。ん~この香ばしさ…香りせ…

「胡麻団子かな?」

「は…嫌いですか?」

「まさか、好物だよ。 いただきます」

モグモグ…

!これは…

「どもども…どうですか?」

「つま~い…美味しいぞ! もう一 個食べよ。もじゅ もじゅ

「よかったです…」

うん、マジでうまいな。  
つて…は? 麻里向で泣いてんの?

「あの麻里？泣かないでください！？俺超困るんだけど…」「めんなさい！何だかわからんけどごめんなさい！俺のせい？俺のせい？」

「ぐすり…そうです…遊星さんのがせいです」

がーん…

少女を泣かせるなんて俺最低だ…鬱だ死のう…生きている価値すらない…

「もし…遊星さんが嫌な顔したりまずいって言われたら…と思つていて…嬉しくてつい…」

え？

あーなるほどうそう言つことね。

「麻里。俺はさ、たとえこれが泥団子だたりとなんだたりと麻里が俺のためにくれたのなら、大切にするし食べろと言われれば全部食べるよ。泥団子でもね。」

「そんなこと…ぐす…しませんよう」

「うん。だからまずいとかそんなこと気にするなつて言つことね。つか麻里つて料理上手いんだな。今後俺と料理しようぜ。麻里が知らない料理を食べさせてあげるよ。ほら、泣かない泣かない。」

「…はい！」

ふー…こんな時、誰かに見られたら俺が悪者に見られるじゃん。女の子を泣かせたーって

「遊星ちゃん

「ん？」

「料理、約束ですよっ。」

「はい、先生。」

少しだけ麻里と仲良くなつた…と細ひつ一回だつた

三顧の礼つて特別でもないよね（前書き）

本編開始

### 三顧の礼って特別でもないよね

俺が董卓軍で働くよくなつてから一ヶ月が経つた。

この一ヶ月マジで大変だったわ

でも以外と居心地悪くないね。美女いっぱいいるし

といひで、丁奉が今の時季にいるなら、他の有名な将たちもいるんじやね？

と思つて、百々田鬼を中国中に回してみた

まずは河内郡温県。司馬懿が生まれた場所なんだけど、やっぱり司馬家はあつた。

けど司馬懿本人がいなくて、なんとその息子であるはずの司馬師と司馬昭がいた。意味不明w。女だつて百々田鬼が言つからひっぱたいておいた。

次。麒麟児（笑）の姜維。やっぱり故郷にはいなかつた。もう魏か劉備にいるのかとも考えて百々田鬼を向かわせたけどいなかつたみたい。まあ姜維を調べたのは興味本意で、仲間にしたくはないなあ。きっと北伐しまくつて兵力をねるねる減らすに違いねえ

つーか劉備調べていたらなんと諸葛亮とホウ統がいた！早すぎねーかおい！

最後、トウ丈。ここつは仲間に加えたい。

史実でも優秀な武将だしね地図とか作ってくれるはず

んま、一ヶ月じゃあこれが限界かな？むしろ頑張った方だろ。

「遊星様、今日の政務です」「おはようござります、遊星さん。今日も頑張りましょうね！」

そんなとき綾と麻里が書簡を持って俺の部屋に来た。恋と華雄さんと霞があんまり机仕事しないから大変なのよねえw

おお…今日も書簡の山…

しょかんが現れた！

しょかんが現れた！

しょかんが現れた！

しょかんが現れた！

しょかんは仲間をよんだ！しょかんが現れた！

たたかう

たたかう

たたかう

たたかう

くそう…マヂハンドもびつくつの増殖…

俺って責任感強いからこげるコマソドなこのみねえ…あー、こんなときにはこそ司馬懿とかトウ丈がいればなー

「麻里へ、司馬懿とかトウ文つて人知らないよねえ…」

「？トウ文さんは知りませんけど司馬懿ちゃんは知っていますよ？遊星さん友達だつたんですか？」

「わうだよねえ…知らないよねえ…  
は？知つてんの！」

「は」私は荊州の水鏡女学院つてこいつで勉強していました  
けれど、氷里ちゃんはそこの学友です」

なんてこいつた…

蛟<sup>1</sup>めんww

「氷里ちゃんをですか！？確かに氷里ちゃんは何度か声をかけられ  
たみたいで、そのすべてを断つたみたいです。まだ自分は知識が足  
りない、凡愚だと言つてわざとだらしない仕草をして。」

「そりや声をかけた奴が凡愚だから司馬懿ちゃんはそんな態度をし  
たんだろう？なら、そう思われなければいいだけさ。駄目かな？」

「うう…あんまりあそこには戻りたくないですか…わかりまし  
た。早く終わらせますよ~」

「ありがとう麻里！そんな麻里が大好きだ！」

「…？あの…ふわわ…」

ああ、照れる麻里かわいいなあ…

「遊星様！そろそろ政務を始めましょー！」

「そんなに怒るな綾。嫉妬する綾も愛してるわ」

「嫉妬なんかじゃ…あつま…す…けど…」

恥じらう綾もかわいいなあ～

~~~~~  
んで月と詠に少しだけ休暇をもつて荊州に来た。なぜか詠に文句  
言われたけど

「へえ～ここが、水鏡女学院つて。麻里、司馬徽先生によろしく言  
つてきてくれ

「ふわわ…はい…」

なぜか怯えた様子の麻里が建物に入つて行つた

じせいかくして麻里が出した。なんと嘘うそ。

「しゃーないね…近くの宿に止まつてまた明日くるかあ  
そう簡単に会いたい人に会うことは出来ないよねえ…ま、劉備よろ  
しく三顧の礼でもさせてもらこますか…

次の日

またいないらしい。これはまさしく三顧の礼っぽくなつてきたねー

麻里は、なんか知ってるなこりゃ

次の田

いるのだが今は手を放せないらしい  
昼寝じやないだけマシかな？待つていろ。

「あのわあ……麻里、俺に嘘ついたろ？」

「ひえっ！？ そんなことありませんよ？ ふわわ～」

「麻里、俺は嘘つく奴は嫌いだなー……綾、麻里は俺を信じられないんだってさ」

「新編古今圖書集成」卷之三十一

「！？／＼／遊星様…恥ずかしいですう…／」

綾の髪はさらさらで気持ちいいんだよね〜なでなで

「「J...」」べとなぞこーーー私は遊星やんこ嘘うそじだあーーーひつへ  
…ひつへ…」

「わかつてくれればいいんだよ麻里。よしよし…」

「ふわわ～…遊星やん…ひつへ…」

麻里の髪はふわふわでまたいいね。ナニポ

「女の子を泣かせるとは悪い人ですねえ」

おおへ、二つの間にかいた黒髪の美熟女。

「あなたが水鏡先生ですね？」

「確かに私が水鏡こと同馬徽といいます。この度は試すよつなこと  
をしてしまい申し訳ござこません。」

深々と頭を下げる同馬徽先生

「いやあ、気にしないでください。でも理由は聞きたいですね」

「麻里があまりにもあなたのことを褒めるのでびつしてもあなたを  
はかりたく思いましてね。麻里つたら貴方に心酔していますよ」

「ふわわ～／＼／＼」

深々と帽子をかぶつて顔を隠してしまった

「それはＫＯＥＩだね。んで先生、私は合格ですか？」

「もちろんです。普段はみだりに男性は入れないのですが、貴方はどうぞ。」

「おつがと「ハ」ヤニモアー。」

i  
n 応接室

「さて、麻里から」要件は聞いています。司馬懿を連れていきたいのですね」

「まあ…その通りです」

「あの子は確かに学院1、2を争うほどの天才ですが、これまで何人も司馬懿を訪ねに来ましたが、だれも司馬懿の心は動かせませんでした。」

史実でも曹操が武力で無理やり士官をせたしね。それまで引きこも  
りだつたし

「今司馬懿を呼んでいます。」



「ノン

「氷里です」

「つむ、入れ」

「失礼します…！麻里ちゃん…どうして…？」

「えへへ…久しづりだね氷里ちゃん」

「氷里。麻里との話はこれからいくらでも出来ますよ。今はお客様が優先です。」

「はい…！？男の人がどうして校舎に」

「私がお招きしたのです。わざわざ二回も貴方に会いに来たのですよ。」

「同馬懿さん、私は遠田智と言っています。会えて良かつた…」

紫の髪を長くのばして、黒のシルクハットを被り、背は麻里くらい。シルクハットに合つマジシャンみたいな格好をしている。黒のマントがカツコいいね

「私は同馬仲達です。どうも…」

「貴方に土官してほしいそうです。では私達はしばらく席をはずしますね。麻里はここにいた方がいいでしょ？」

そうして先生と綾は出ていった

「さて…司馬懿さん、私の要件は今の通りです。私の仲間になつてくれませんか?」

「氷里ちゃん…お願ひ!」

「…………」

「はっ…無言かあ

「「」めんなさい…私は誰にも仕えません…決めたんです。」

「まあ…そうだよね…でも、決心するのは待つてくれないか?今から俺のことを知つて、それから決めてくれ」

「…麻里ちゃん…」の人に知つてるの?」

「もちろんだよ氷里ちゃん!私の「」主人様だもの!」

「え…?」

驚く司馬懿

それから俺と麻里は今までの出来事を話した

綾との出会い、麻里との出会い、黄巾との戦い、董卓軍に入つたこと、綾や麻里と修行したこと…

司馬懿は少なからず小さくリアクションしてくれた。

「私は絶対!遊星さんは天下を治められると思う。たとえ遊星さんが放浪しようとも、城に幽閉されようと、私が支えて助けます!」

「…つ!まりいつ!」そんなに思つてくれたなんて…感動で脱水症状になりそうだ…麻里がふにやふにやになるまで撫で回してあげた

「…なるほど、貴方は本当に天に昇れる龍となつたのでしゃ。」  
麻里ちゃんの人を見る目は確かですし

それはどうも…

「そこで貴方にお聞きしたい。この国はこれからどうなるとお考えですか？」

「わたくし、黄巾の乱の首魁、張角を私が倒し、やがては帝にのぼりつめ、私が王なり、漢を再生する。」

「やつ…ですか…」

見るからにがっかりした様子の司馬懿  
「と、でも今までの奴等には言われたかい？」

「え？」

「んな」と思わないよ、めんどくわい

「ふにゃふにゃ…ふわわ～」 麻里、そろそろ寝つてこ…

「国を一つにまとめるに、漢なんて知つたとか。そんなん滅び時  
だろ？」

「…私もやつ思こます…大陸には野心家が蔓延り、皇帝の力はかな  
り低下しています。即ち、これは国の分裂が起こる兆しとも言えま  
しょ。」

「そして分裂した国で起るるのは天下統一を目指す有力諸侯たちの戦争…漢は滅亡する」

「………そう言つてきた方は貴方が初めてです。遠田智さん」

「もうこの戦乱は避けられない。だからこそ、俺が一刻も早く時代を終わらせる…その為には司馬懿、君の力が必要だ…」

「ふう…失礼ながら、たかが董卓軍の将軍の一人でありながら、天下統一の志を秘めるとはおこがましくはないですか？」

「あははwww確かにね。でも董卓はこの戦乱では生き残れないよ。それも近い内に消えるかもしれない。そこで俺が董卓を救い、新たな勢力としてこの大地に踏み出すつもりだよ」

「…? 遠田智さん何を?」

麻里は動搖しているけど司馬懿は

「ふふふ…あははは…」

…爆笑された

「素晴らしい理想ですね! 理想をかかげ自分で自分は戦乱に立てる器をもつていると自負するなんてまったく図々しい! 凡愚にも程がありますよ! あはははwww なんかすごい馬鹿にされてるな俺…」

「でも、貴方なら実現するかもしない…そもそも思いました…やつ

「ぱり麻里ちゃんの目は間違つてませんね。貴方に非常に興味がわきました。微力ながらこの司馬懿、貴方を支えましょー！」

「わのびうきの心

「ありがとう氷里ちゃん！」

「姓は司馬、名は懿。字は仲達。真名は冰里です！よろしく遠山智

10  
h

「遊星でいいよ氷里。よろしく」

「はい遊星。

せつたば

「お黒竈ケッエ!!」Jにて勝てぬ!!」Jへ諸葛亮!!

「せつかくですから、校内見学でもしませんか?」

「ああ~いいっすね~」

というわけで校内見学することにした

「JJKは武術訓練場です。遠呂智さん、武の心得は？」

なんと食堂完備で保健室まである。まさに学校だなあ  
そしてなぜか武術訓練場まであつたしかも結構人いるし

「ああ……あらせ」

「では手合わせ願います。」「え？」

「ですから、私と手合させ願います。奈里、音里！」

奈里、音里と呼ばれた子が手をやめていつかに来た

「遠咲智さんの武器は何ですか?」

「一応大鎌ですけど……」

「大鎌ですか

てください」

「「はい先生」」

タツタツ

「今の2人は…」

「姜維と向朗です。2人とも優秀な私の生徒ですよ」

ええ！ あらが隻誰！

文武両道だったのは本当だったのか…

「アーティスト」の「アーティスト」

「さあ、準備はいいですか？」

普通の大鎌を渡された俺は白羽扇を構える先生と対峙している

## 「試合：始め！」

あ、始まつた

んじやあガンガンいーじづぜで

「！」

グオンと大鎌を振り下ろす

「遅いですよ！」

ひらりとかわす先生

「次はこっちの番ですねー光矢！」

「ぬおおー!?」

なんと羽扇から光のビームが出た！  
いや、違うなこれは

「気の塊か！」

「よくお分かりになりましたねーもう一撃！散矢！」

「うわあつ！」

ビームが三本も出た！

「逃げてばかりですか？武の方は残念ですねー！」

「いやいや、俺の本気はここからですよー…」

遠距離モード武装なし！

「我に挑めー！」

わあ、行こつか！

狂氣の宴 前編（前書き）

長らくお待たせしました

## 狂氣の宴 前編

十 麻里サイド十

「それでね…」

先生と遊星さんが見学してゐる間氷里ちゃんとおしゃべつしてゐた。

「なんだか騒がしいね…」

氷里ちゃんが呟く

すると近くの生徒の集団が急いだ様子で通りすぎていった。

「ねえ、何かあつたの？」

生徒「訓練場で先生が男の人と戦つてるみたいなんです！それじゃあ！」

そうこつて行つてしまつた

「麻里ちゃん…これはもしかしなくても…」

「遊星さんですよーー私たちも行いついーー。」

~~~~~

「雷砲ー！」

手から雷を走らせるー！

「当たらなければひとつこいつとはあつません…」

先生は華麗にかわしていく

くそ～遠町智モードならいい勝負できたのに…  
つか先生強くな？俺が弱いのか？

「あの男の人…若干先生をおしてるよね？」

音里こと向朗が呟く。

「ふん！先生が手加減してるだけよ！男なんてクズでしかないんだ  
から！」

何よ音里、あの男に興味あるの？

奈里こと姜維が反抗する

「そんなことないよ…私は、奈里ちゃん一筋だよ…」

「当たり前ね！今更言わなくともいいわよ。先生、そろそろクズを  
潰してあげてください！」

おい姜維…クズはないだろクズは  
つかおまえらレズかよ…

「『めんなさい…奈里は少し男嫌いでして…光矢・連…』

連續でビームが出てくる

「いえ、気になさらずに。私精神だけは強いので。…効かぬ…」

鎌を振り回してビームを消す

「どうもおめでたー。」

先生に気が集中していく  
こりやましいか！

光連弩・乱舞！」

前方から大量のビームが迫ってくる！  
しかもビームがさつきより太くて威力が桁違いだ……

「さしづめ無双乱舞か……どう切り抜けようか……」

十氷里サイド十

かつてこの学院にも暴漢が入つたことがあつた。

そのとき私達を守つてくれたのが先生で、暴漢は十数人いたんだけど、先生は無傷で追い払つた。

つ  
た。

けど姜維も、私も、全く先生にかなわなかつた。

「毎日のたゆまぬ努力。慢心しない精神。そして何より……」

「何より？」

「大切な人を守りたいという信念です。

暴漢たちは己が欲のままに動いていたのでしょう。周りを顧みず、ただ踏み荒らしてゆく。

そんな心に、私の信念は砕けません。あなたたちも、本当に守りたいと思った相手が出来る時がきます。」

そう言った。

そんな先生が今遊星と戦っている

実力は均衡：してない！？やや遊星のほうが押してる！先生は手加減している様子はない。

あの暴漢を追い払った時と同じ光の乱舞を展開している…

「先生、そろそろクズを潰してあげてください！」

姜維が叫んでいる。

「むつ！遊星さんはクズじゃないです！」

麻里が怒ったように叫ぶ

姜維：あいつは気に入らない…私が麻里や音里と仲良くするとすぐに割り込んできて、引き剥がしてしまつ。

私は仲良くしてはいけないのか？その時姜維は嫉妬に満ちた目で私を睨んだ。麻里と真名を交換した時だ。あいつは私に墨を投げた。

あいつは同性愛者だ。それが暴漢がきっかけでもない真正の。独裁欲も強くて自分が気に入った人物は自分だけに仲良くするようにしないと気がすまないようだ。だから私を邪魔者扱いする。自分の欲を他人に押し付けることも嫌い。

「！先生本気だね」  
麻里が言う

「これじゃあ遊星避けられないんじゃ…」

「大丈夫だよ…遊星さんだもの」

遊星だからって… どんな理由よ~

~~~~~

考えな！考えな俺！とにかくいたる處に流れん！？

上へ高く飛ぶか？ためた…やつは、空中で追撃をかわせる自信はない…

ならどうする…走りながらガチ避けか？無理無理！シュー ティング  
ゲーは苦手なんだ…

もう一つそ動かないとか？

いや……まとも……姿勢が低ければ避けられる……

「ひらめいた！」

## 秘技 マトリックス避け！

「さあああー！」ゲームが田の前を飛んでゆく！あつ！鼻にかすった！ 曲げ姿勢を低くし飛び道具を避ける技である！特に銃弾がかわせる。

「ぎゃあああー！」ゲームが田の前を飛んでゆく！あつ！鼻にかすった！ しかし二回は無表情に。グラサン欲しいな

先生「なんと…」

麻里「さすが遊星さん！」

氷里「えええええ！」

姫維「はあああ！？」

「ふつふつふ…」この未来的回避術に驚きを隠せまい…

炎の塊をすばやく作りふん投げる！

「大炎弾！」

「極光壁！」

「なにい！？」

炎弾が輝く光の壁にかきけられた。けど…

「……光弩と極光壁は…私の大技…はあ…もつ私は氣がありません…私の負けです…はあ…疲れました…」

気の量には限度がある。あんな大技連発したらそりゃ フラフラになるよ…

「「ありがとうございました」」

うーん… 静かな勝利つてあんま嬉しくないな…

「先生大丈夫ですか？けつこいつ身体辛いんじや… 手を貸しますよ？」

「あら、ふふ… 女性への気遣いも持つてらっしゃるのね… もつと早く出会いたかったわ」

「え？ 先生独身なんですか？ こんなに綺麗なのに」

「誘つているのかしら？ 乗りたいのは山々だけれど、あの2人に私達、殺されてしまつわ」

「遊星様！ 目的ははたしたはずー早く帰りましょうー」

「どうせ私は先生みたいに魅力ないですよー」

綾つてばけつこいつヤキモチ焼きなのね… 麻里は拗ねるなつー 麻里もかわいいよ！

「ふふつ… 麻里も氷里もいい人に出会えましたね…」

~~~~~

「ほり言つたでしょーー遊星さんは負けませんー」

「すゞいね遊星。麻里ちゃん、こんな人めつたにいなによ……」

「当たり前だ。遊星様は遊星様しかいない！」

「皆壊めてるんだよな？」

なんだかまた俺の株が上がったよ！ついで。  
そうそう、いい忘れた。

（見たか姜維！悪口取り消せ！）

と心の中で言つた

つて俺の前に姜維！聞こえてないよな……

「…………」

あの～姜維さん？

「…………麻里」

「へつ？…………奈里ちゃん……」

みるみる顔が青白くなる麻里

何々？あれか？同じクラスにいるけど全く歯車があわない感じ？

「やつと……帰つてきてくれたんだね……」

「つー」

「私は感激だよ麻里。黙つて私の前から消えたことは許してあげる。私つて心広いし。でも、もうすこと一緒だからね……?」

「ひつ……」

「うん? 意味不明だ。」

「麻里、どういう関係?」

「誰の許しを得てその名を呼ぶ汚物! はやくここから消えろ!」

… オウ、マイガ  
俺なんかしたか?

「ん? 何、氷里」

くいくいと俺の手を引っ張る氷里

「姜維は…同性愛者で、麻里ちゃんに惚れてるんです……」

ああ、成る程…だからあんなセリフが

「あのね、奈里ちゃん、私は…」

「何も言わなくてもいいよ もう気にしてないかい?」

「麻里つて女の子好きだったの? 俺はそんなこと気にしないの?」

ホモとかレズは現代でいろいろ読んだからな…

「ち…違いますよー私は男の方が…（遊星さんが）好きですー」

「やうなの？」

「んなわけないじゃない汚物。私と麻里は恋仲よ」

「って言つてるけど？」

「恋仲なんかじゃありません…奈里ちゃんの思い違いです…」

「え…？ そんなわけ…」

「んー？ つまり「うつ」とかな。

姜維の一方的な愛は麻里を困らせている

しかし姜維は麻里を恋人だと勘違いし両思いだと思いこんでいる

姜維は魔性の百合

であつてる？ 氷里」

「はい。」

「残念だつたな姜維。麻里はお前の愛に答えられないつてさ」

「奈里ちゃん、私好きな人がいるの… でね、この方に仕官したんだ。私はここにいるわけにはいかないの。奈里ちゃんと一緒にいた

くないよ。」

麻里は力強く言った。

「よく言つたな麻里。よしよし」

「ふわわ…」

わ…、これで終わる妻維じや…ないよな?

狂乱の宴 後編（前書き）

怒濤の新キャララッショ

また長らく空けてしまい  
本当に申し訳ありません

「んふふ……あはははははははははは…」

あ、姜維壊れた

「そんなはずないそんなはずないそんなはずないそんなはずないそんなはずないそんなはずないそんなはずないそんなはずないそんなはずないそんなはずないそんなはずないそんなはずないそんなはずないそんなはずないそんなはずない！」

姜維が叫ぶ

「嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ！これは嘘だ！私は麻里が好き！麻里は私だけのもの！……そうよ！麻里は嘘ついてるんだ！誰にも渡さない！私が嫌いな麻里なんていらない…」

「うわあ……これは完全にヤンデレですね…間違いない

「麻里、俺の後ろにいる！絶対離れるな！綾！麻里の隣で姜維から守れ！」

「はっ！遊星様！」  
「ふわわ…うえつ…」

「あーあ、泣かしちゃつたー姜維泣かしたー！」

少し挑発しつゝ

「お前は黙れ！存在する意味もなこ『』が…あ、 麻里、 行け！」

「ぐすっ…行かせん…奈里ちゃん…こ…え、 美緒さん…

今田…あなたと縁を切ります！私の真名は返してもらいますから…」

「…………は？」

俺が止めををじてやね！」

「理解できる？あんたはフラれたの。 麻里とお前は恋人でも、 友達でもねーんだよ…」

「…………」

「やつこや先生、 黙つてないでなんか言つて…

「んぐぐ…んががが…キャハハハハハハハハ！」

なんかす」に音してんな

「やつか… そうだったんだ。 麻里はこの『』操られてこるのね…？ そうよ。 私の麻里が嫌いっていうはずないもの… すべて『』のせ

いなのね… 音里！私の槍！」

「はいっ…奈里ちゃん…」

音里！」と向朗が槍と鉄扇を引っ提げて現れた。

「まつててね… 麻里。私が助けるから！」

姜維が槍を構え

「あのその… あなたに恨みはないけれど、ごめんなさい…」

向朗が鉄扇を構えた。

「どうなつた

「ケンカをお望みか…ならしゃーないな…」

手加減はしない！遠呂智モード！

「我に挑むなら… 容赦はせん！」

「ふつ、先生と戦つて体力を消費した今、一人がかりなら勝てる…」  
「油断大敵だよ！ 奈里ちゃん…」

「遊星様！私も…」

「綾、俺は麻里を守れと命令したはずだが？」

「……はい」

しゅん…となる綾

「心配すんなつて。絶対負けないから」

「余裕」ってんじゃねーぞ「ミミがああああー！瞬迅槍！」

ヒュッ！

姜維の迫真の突きが俺の顔面にせまるー…けど  
「遅い。おやすきる」

ヒュッ！

綾の方が速いな

「手刀！」

バシッ

「な…」

ガキは寝てひ…  
ドサッ

そして姜維は意識を失った

「えいやあつ！」

向朗が鉄扇を振りかざし打つてくれる

バシン！

「…………つー

痛つてええ！

モロくらい鉄扇なめてた…耳鳴りする…

「姜維は倒した。」それで君と争う理由はない。武器しまーな

「…………はー」

うん、向朗はいいだ。

「さて…麻里、ふつ切れたか？」

「…はー！」

「先生、もう寝たふりはいいですよー」

「ふわーよく寝ました。んで、何かありました？」

「こつ…

~~~~~

「それじゃあ先生。お世話になりました

「いやですわ先生だなんて……真里とお呼びください」

「先生つー遊星さんをからかわないでくださいー。」

「ひどいわ麻里。冗談ではなくてよ。」

「わかりましたよ、真里先生。俺の真名は遊星です」

「はい、遊星」

「遊星さんもー素直に交換してー全くもつ」

「やつは詫ひけどな……女性に親しくされて喜ばない男はいないんだ  
ぜ?」

「遊星つー…けつ」<sup>1</sup>う砕けてるよね

これは氷里だ

「堅苦しこのも悪くはないけど、砕けてる方がお前りと仲良くな  
れるだろ?」

「遊星様はどんな遊星様でも素晴らしいはずです」

綾…「なぜかいいからやめてくれ…

「遊星、横を向いてくれます?」

「?なんでわ先生。はい、横向きました」

「ふふ、これは親愛の印です」

ちゅつ

「…?…?…」

綾＆麻里「ああああつ！」

氷里「うわあ……」

「またいらしてくださいね？今度は寝床で待つてありますわ」

「あわ…あわあわ…」

綾「麻里！ここにいては遊星様が危険だ！すぐに立つぞ！」

麻里「はい！馬はもう準備出来てます！遊星さんは固まつてないで

！ほり、急ぐ！」

氷里「それじゃあ先生。行つてきます。」

真里「はい、行つてらつしゃい。遊星に幸せにしてもらひのよ」

氷里「別に私はそんな田で遊星を……」

真里「はあ……氷里。あんないい人、大陸に10人もいないわよ。いつかあなたにも恋心が現れるわ

綾「氷里！行くぞ！」

氷里「はい」

「つ待てえええええ！」

「今度はなんだ…」

うなぎりしたように綾がぼやく

「ゼーゼー…貴様ら…かひゅー…かひゅー…ゲホ…氷里をどこへ連れていく…」綾「どこ…」といつても…氷里は私達の仲間になつてくれたんだ

「キ…キキキス…接吻…はじめてのチユウ…」

「遊星様！」

「ゴフツ…！」

「…つて…

誰だ！俺を殴りやがったの…

「遊星様。お客様ですよ?」

ほえ？誰かいたっけ？

「仲間ですか？笑わせないで。氷里はもう誰にも仕えないっていつたわ。大方、弱味を握つて無理矢理連れてこようとしてるんで

「じゃあ、そつはわせなこ」

「とこ、あんたはどからか？」

「貴方に名乗る名前はないわ。氷里を返しなさい」

「そういうなりチャギンーと得物を取り出した。

！あの武器は…

「連弩砲…だと…？」

「なつ…なんであんたが知ってるのよ…まだ誰にも話していないのに…」

「わあー連弩砲だ…あなたはもしかしなくても郭淮さんか？」

「そうよー私は郭伯済よーなんで知ってるの…」

「ふつふ…君のような美少女シンデレキャラを知らないで人生終わ  
れるか！郭淮、お前俺らの仲間になれ！」

「なつ！」 郭淮

「遊星様…」 綾

「はあ…また遊星さんに女の子が…」 麻里  
(つんでれきやらつてなんだろつ…)

氷里

「あらあら…」 真里

よく」」まで個性豊かに揃つたものである。

「あと、氷里は無理矢理つれてきたわけじゃないぞ」「練里、」」の人はね、本物だよ。一緒にいかない？」

「むー…氷里い」

考え込んでしまつた郭淮

「練里。私は彼を認めています。きっと、どんな英雄にも負けない器をお持ちですよ?」

「先生まで…」

「あと、奈里が嫌つてました」

「先生!私は彼についていきたく思つます!」

「姜維だけでそんなに変わるの?」

えええええ!

「あんた!勘違いしないでよ!別にあなたがかつこいいからとか氷里がいるからとか姜維とおしゃばできるからとかが理由じゃないんだからね!」

「はい、シン解説ありがとつ

「俺の名は遠田智。遊星でいいよ」

「ふん…」

「私は丁奉。真名は綾よ」

「徐庶です。真名は麻里です」

「ええ、よろしく。郭淮よ。真名は練里

「それじゃあ行こうか、練（ドカン）とー？何故俺に射つた！  
俺じゃなきゃ死んでたぞ！」

「今私の真名言おうとしたでしょ？あんたに許した覚えはないわ。  
次はないよ」

……（・・・）ショボーン

なんで俺だけだめなんだ…

こうして俺の心にしつかり矢は刺さつたまま帰路についたのであつた…

## 黄巾の乱 決着（前書き）

真里「作者さんから言えつて言われたから仕方なく説明します

郭淮はシンデレキヤラです。格好はミルキィなホームズかシャーロックなホームズの格好です。

要は探偵っぽい服装。

背は麻里や氷里より高く、中学生くらいです。

作者を一人これでいい？

## 黄巾の乱 決着

「帰りが遅すぎよーあんたが休暇の間どんなに私が…クドクド」

お城に着いたとたん詠のありがた（迷惑）いお説教

なんでも俺だけ怒られてるんだ

綾  
は

「遊星様の責任は私の責任でもあります！どうか遊星様を許してください。ただけないでしょ？」「綾～男にはどうしてもやらなければならぬ時があるんだよ」くつ！H A N A S E 氷里！私はまだ…」

というかんじで退場してしまった

「つまり！ あんたが…」

詠はまだまだ続きそうだね……

十冰里サイド十

今のところ董卓軍はなかなか悪くない一諸侯だと思つ。私と練里がいれば尚更だ。でも遊星が言つてたあの言葉

## 董卓軍は生き残れない

これがどういいう意味だかよくわからないが、とりあえず私は最善を

つべすまでだ。

「そしてこじが私達の部屋です。あつちは綾ちゃん。そのとなりと向かいは氷里ちゃんと練里ちゃんね」

「麻里、この部屋は？」

練里が一部屋の扉を指す

「や！」は遊星様の部屋だ」

綾が答える

「ふーん…入つてなんかいたずらしてやれりと

一カツと笑う練里

「え？でも鍵がかかってるはずですよ~」

麻里が言つ。まあそつなんだけど…練里は少し違う

「ちつ…めんぢつね…けど、こんな錠、私の敵じゃないわ」

そうこつて懐から金色の鍵をとりだした

「最後の鍵」といつて、どんな錠前でも扉でも鉄格子だつてはずせるんだつて。前に得意気に話していた。

力チャ

「よし！開いた！」

「ええええええ…まずいですよ練里ちゃん…」

「そりですよ！勝手に部屋に入るなど…」

麻里と綾はとがめるけど

「あたしはどうでもいいけど、遊星の部屋、入ってみたくないの？  
あたしはどうでもいいけど」

練里ちゃん…入りたいんだね

「それは…そうだが…」

「ふわわ…遊星さんの…私室…」

2人も撃沈した

「もひいじょ皆。皆ではいりましょう」

私も興味はあるしね

「ななかなか綺麗に整頓されてるね

「ふん！つまらないの…」

「遊星様の匂いがする…幸せだ…」

「ふわわ～」

それにもしても…よく整頓されてる。いろいろ奇妙な物があるけど…

「ねえ、この古紙を山みたいに折つたのは何?」

## 綾に聞いてみる

「それは針戦<sup>ハリセン</sup>と云ひしきです。なんでもシップの威力が違つとか」

意味がわからない……

「これ…綾と麻里よね?」練里が棚の上の置物を指した  
土か何かで作られた綾と麻里にとてもよく似た人形があつた。

「良くできたね。色も綺麗に塗られてるし」

「60点ね。私が作つた方が上手いけど」

~~~~~

卷之三

途中で月が助けてくれて、本当に感謝感激雨あられってね

話せやん  
クレヨンは遊星さんは会うて嬉しかったんですねよ

なんて月に言われた時は思わず萌えた。萌えつきた。とりあえず部屋へ帰ってゆっくりしよう。

ああ、そうだ。氷里と郭淮が仲間になったから新しくねんどろいど司馬懿とねんどろいど郭淮を作ろう。

美少女をねんじるいじにしなくてどうするんだ！って思い立つていろいろ資材集めを頑張ったよ

粘土は比較的楽に入手した。大変なのは塗料だつたね。  
するのにどんだけ苦労したか…  
ん? なんであいつら俺の部屋にいるんだ?

「呪へできてるね。色も綺麗に塗られてる」

そうだろそうだろ？もつと褒めてくれ

「60点ね。私が作った方が上手いけど」

卷之三

「なつ！あんたいつの間に！」

「お前たちが俺の（ねんどりこどりの）綾と麻里に手を着けた時からだ」

遊星様の

「ふわわ…遊星さんつてば大胆ですよう」

なんでおまえらは思っている...?

「なんだ郭淮。うらやましいのか？」

「んなわけないでしょ！」

「心配すんな。ちやんと氷里とお前のも作るつもりだし」

「やめて。寒氣がするわ」

「素直になれよ郭淮。ほら、撫で撫でしてやるぞ！」

「死ねつ！変態！」

「酷いねえ郭淮よ。んじゃ氷里おいで」

「いえ、私は結構ですから…」

「恥ずかしがることはないですよ氷里ちゃん。いいなー」

「…………では少しだけ…………」

「ちよつと氷里！」

— HAHAHAA ! 氷里は素直だからな、ほれ、

シルケハットをとめて髪を簾で付ける

۱۱

ううとりしてきた冰里。やばい、何か目覚めそうだ……

「いい加減にしなさいよっ！」

バシン！

「あべじつー

郭淮のやつ…ハリセンで叩きやがった…痛い…

「痛いよ郭淮！」

「ざまあないわね変態。氷里！目を覚まして！」

「いやわわ、はつ！私は何を……」

「あの変態に触られてたのよ！ほら帽子がぶつて」

「そうでした…遊星、もつと…」

かわいい！氷里かわいい！もうヨリハシでいいや

「駄目ですよ氷里ちゃん！遊星さんのお役にたつたとき」<sup>レ</sup>褒美として撫でてもらえるんですから！

「ふーん…… そうなんだ……」

「つ！お前のせいだ氷里があつ！氷里を返せつ！」

バシバシ

「痛い！痛いよ郭淮！ハリセンやめろ！」

俺がフルボッコされてから数日

遂に黃巾党と決する時が来た。張角、張梁、張宝率いる本隊と戦つていた官軍のが前線を離れてしまつたため、俺たち董卓軍がかわり

に前線にでることになった。

「郭淮、俺はお前が一番心配だ。俺のそばを離れるなよ……」

「んで、俺たち遠畠智隊は初陣だ。皆の活躍に期待しよう。

氷里は丁奉隊の副将に、郭淮は俺の副将にした。

蛟、百々田鬼、牛鬼も参戦させる。さつと100人斬つたり敵将となると「破壊の限つを 넘へてしましょ「つべー」とかいつてくれるに違いない。言わせる。

さてさて、この本隊を攻撃しているのは俺たちだけじゃない。河北の曹操、冀州の袁紹、幽州の公孫贊、その義勇兵の劉備、揚州からの孫策などなどんま、てきとーにやるつぜ

「つて訳だ。策はいらないだろ。戦場の空氣に慣れてくれ

「綾は、遊星様をお守りするのみです」

「期待してよ綾」

「緊張してきました……」

「大丈夫。隊の皆が麻里を守ってくれる。麻里はよこつむじつに

「私、武はあんまり……」

「先生直伝の羽扇術なんだろ? 氷里ならいける。心配だつたら綾や俺と一緒にいな」

「なんで私があんたの副将に……」

「な……何よ……見てなさい……将の2人や3人、軽く撃ち抜いてやるわ」  
だといいけど……

黄巾の乱十始まりの鐘十

勝利条件

張角、張梁、張宝の撃破

敗北条件

董卓の敗走

味方軍

董卓

十遠呂智

十一刀

何進

十張角

十張梁

十張宝

十張曼成

十張廖化

賈栩

陳宮

周瑜

夏侯淵

張遼

呂布

夏侯惇

劉備

孫策

曹操

袁紹

何進

董卓

敗北条件

勝利条件

黄蓋 陸遜 関羽 張飛 趙雲 謝玄 丁奉 許褚 徐庶 司馬懿 ホウ 統 張郃 公孫賛 顏良 文酬 華雄 荀イク 皇甫嵩 朱俊

いやはや、メンシやばいね wwwwww 黃巾

党オワタ w

百々日鬼からの情報で、光を反射する見たこともない服をきた男が曹操軍にいたそうだ。  
間違いなくあいつだな…ここであいつを死なせるわけにはいかない  
けど、曹操がいれば大丈夫か

「董さん、無理はしないでくださいね…」

月が心配してくれるとは…お兄さん頑張つちやうよ~殺つちやうよ~

「はーー！刃様の為頑張りますー。」

「刃の為や、やつたるでー。」

「…………頑張る」

「刃の遊星お兄さんにはせなぞこつて」

「せんなんおひやうせんと、足元すべわれるわよー。」

「何、気にする」とはない。死んでも刃と詠は守つてみせや」

「なつ…ふん！期待しないでおくわ」

「厳しこお言葉…」

「ほんなんおひやうせんと、出陣や」

靈の一句で頭をひくの陣を出でこつた  
わい、俺も戦闘準備しないとね

「…………遊星」

「ん、何？詠」

「……ホントに死なないでね」

「…心配すんなつて、生きて帰つてきいやるかい？。帰つておたら  
一緒に食事でも行かない？」

「な…ひるやい馬鹿ー早く行つてきなぞこよー。」

「はいはい」

さつてと、死亡フラグもたてたし、いざ、出陣～

左翼に霞、右翼に俺ら、本陣は恋が配置している。  
先陣の華雄が戦闘に入つたみたいだ。  
遠田智モード！

「左翼と合わせ、前線を押し上げよ……弱き者共を残らず踏み散らせ」

「「はっ！進軍！進軍～！」」

俺の遠呂智モードの喋りにも皆慣れたようで、俺が遠呂智になると皆表情が一気に真面目になる。スイッチの切り替えの出来る人間に育成したからね。

「遊星…どうしちやつたの？」

「ああ、氷里たちは初めてだな？あの遊星様は。戦闘や訓練になる  
とたちまちあのようになるとになる。それが私達の気持ちを切り替え  
させてくれるのだ」

「少し怖いけど……いつも遊星さんより頼もしく感じますよ」

「なんなのよ…あいつ」

「郭淮、お前は人を殺す覚悟はないだろ？」

卷之三

「敵とぶつかるまでに覚悟ある」とだな。ここは戦場だ」

俺が一番郭淮を心配する理由  
それがこれだ。避けては通れない道だぞ?んま、少し助けてやりますか

おつと、敵さんのお出ましだね  
旗は?「廖」と「趙」。廖化と趙弘か。そのはるか彼方に「張」の  
旗。あそこか、張角さんは

「悪しき蒼天の愚者ども!天の裁きをおお!」

~~~~~

いかんいかん~んなやついるわけないって~

「遊星様、敵が突撃してきます!」

「鶴翼の陣をしけ!死ぬことは許されぬ!生きたくば、斬れ」

「遊星様に手出しません!」

「凡愚どもが...滅してくれる」

黄巾兵「あつちに女がたくさんいるぞ!やつちまえ!」

あらあら、じつにたくさん兵がなだれ込んできたね。好都合好都合。

郭淮、逃げるなよ?

廖化「お嬢さん、また会いましたね」

綾「また貴様か。今度こそその首を跳ねてやる！」

廖化「まあ落ち着きなよ。俺は君の虜となつた。その満月のように輝く君はまさしく俺の伴侶にふさわしい。どうか、俺と一緒になつてくれないか？」

綾「勝手に決めるな屑。私には生憎想い人がいる」

「なんと…まさかあのときの大鎌をもつっていたあの男か！」

「やのとおりだ」

「くつ…俺の女神の心を撃ち抜くとは…あんなやつより私のほうがかつこいいでしょう！」

花のよつに可憐で美しい貴女にふさわしいのはあんな石ひのよつこの俺！」

「貴様に褒められても煩わしいだけだ。それに加えて遊星様への侮辱…断じて許せん。そろそろ口を開かしてやる。」

「あの石ひの遊星つてのか…様付けを要求するとは傲慢な」

「魔神剣！」

「つわあつー何するんですか！？」

「それは真名だ。訂正しても許さん。」

「真名？石じろに真名なんてないよ。それより俺の真名は嵐だ。これから嵐って読んでもよな。君の真名は？」

「呼ばぬし、教えん！瞬迅剣！」

ガキン！

「くうひー…どうやら俺の腕つぶしを『ご所望かな?』いいぜ。相手にな  
るー。」

1 ; 1 - , - . 1 - 1 -

趙弘「そんな……俺の戦闘が省略されるなんて……」

# 敵将！撃ち取つた

蛟「破壊の限りを尽くしましてよ。」

決まつたね

十練里サイド十

戦闘が始まった。左手にもつ連弩砲が凄く重たく感じる… 今遊星が斬り殺したあの少し立派な鎧の男が趙弘だろう。

黄巾兵G「なんだ? こんなとこにガキがいるぞ」

つー黄巾賊…

黄巾兵「へつへ…将来が楽しみな面だなあ」

黄巾兵「俺らで使つたあとに売りさばくとじよつせ」

ゲヘヘ♪とゲスい笑いを浮かべる賊ども…

殺さなきや…私の連弩砲ならこいつらを倒せる…

動いて…私の体…捕まつたらどうなるか想像できる…そんなの嫌だ

…助けて…

「射て、郭淮」

「え？」

「ヤキン！」

遊星が連弩砲に矢を込めて正面の賊の頭に銃口を向け、  
バーン！

私の手で発射させた

一瞬何が起きたかわからなかつた

でも正面の賊の顔には穴が空いていて、ぐらりと倒れた

私は…人を殺したんだ

別にいけないことじやない。戦場であることとは人殺しだ。

バーン！バーン！

他の2人も胸に穴を開けて倒れた

（作者より  
小さい子が初めて包丁を使つとき、親が子の手に親の手を重ねて斬  
るのを手伝うイメージです。このとき連弩砲は郭淮がもつっています  
が、発射したのは遊星によるものです）

頭が真っ白になつた。胃から込み上げる」の感覚は……「ううう……  
おえ……」

あまりの気持ち悪さに吐いてしまつた。  
戦場だつて分かつてたのに不甲斐なくて、かつこわるくて

「ううう……うう……」

涙が止まらなかつた。

「…………郭淮」

「うう……ぐすつ……ゅーせい……私もう無理だよ……」

「何が無理なんだ? いっぱい吐け、いっぱい泣け。それが普通だ。  
俺が一緒にいてやる。だから逃げるな、乗り越える」

「ううう……うわあああ……」

~~~~~

はあ……」やうやく戻るはめんとくをいから嫌なんだかなん

「ふふつ、カツコ悪いわね、私」

「でも、これからかっこいい郭淮を見せてくれんだろう?」

「当たり前よーあと詐してあげるわ」

一  
？  
何  
が

「私の真名よ。忘れたわけじゃないでしょ？」

……………ありがとう。それじゃ進むぞ練里！

「わざわざなくとも！」

黄市兵一あの男が悪いと大将だ！せーちまあ！」

一 わ||こわ|| いれんりたすけで|| ( 棒読み )

バカにしてるの！？

ズドドドー！

連射した矢が黄巾兵を蹴散らした。

「死ねやおらああー」

# チャージ1大衝撃波！

ふー、今日も吹き飛ばしたー 俺TRUEEE

「我らのほうが優勢だ！」のまま蹂躪せよ。」

ପାତ୍ରବିନ୍ଦୁ ।

十 紗サイド十

なかなか達者な武をお持せのよ二た  
お嬢さん ますます惚れる

「貴様に時間をかけてられん。次で決める！」

「廖化殿！伝令です」

「はあ？ 野郎は呼んでねーんだけど……萎えるわー」

趙弘歎が討死！ 我が方壊滅的損害です！」

「報告！ 東より敵援軍と思われる軍勢あり、このままでは囮まれてしまいります！」

「はあーせつかく張角ちゃんたちと仲良くなれたのになー。でも死にたくねーし……仕方ないか。総員これより解散！囮まれる前に逃げろ！」

(援軍? 誰だろうか。遊星様の旗はまだあそこにあるし…)

「どうわけだがお嬢さん。俺は諦めないよ。また会つ日まで！」

「まつづ一逃げ足のはやいやつだ…」

そういうのは氷里は大丈夫だろうか……

氷里一進撃は必要ありません! 反転して遠田艦隊と合流します!」

101

良かつた、無傷のようだ。

一 廉化の副将をうちとれた…これで褒めてくれるかなあ?「

私は何をしてんだ… ガッケリ…

## 遊星が趙弘を撃ち取った頃

「黄巾賊を迎撃します！ 櫓兵の皆さん構え！ 歩兵さんは放てー！」

「アサヒ ちがい！」

「押すな！矢があたるだろ！」

麻里「出鼻は挫きもした一瞬で突撃しましたー。」

「おおーー。」

「徐庶たんには指一本触らせんぞー。」

「死ねや年増がー。」

「12才以上は消えろブタジもがー。」

「YESロコータンのタッチー！」

黄巾賊「ひーいっーなんだー」「ひーいー。」

十数時間後

「私達の完全勝利ですー。ありがとうございましたー。」

「ああ、徐庶たんの笑顔だ…」

「俺…死んでも悔いはないや…」

「俺もだ…」

「とれー」

「これからもよろしくお願いいいたしますね皆さんー。」

「「「はいーー」」

死者〇、負傷者〇であった

~~~~~

さてさて、俺達は大勝利したわけだが

「百々目鬼イ！」

「ハツ！」

百々目鬼には華雄さんと霞の部隊の動向を探らせておいた

「2人はどうなつてゐる？」

「張遼殿は敵の数多く、いまだ決着がついていない模様。ですが優勢。時間の問題かと。華雄殿ですが…我らをおいて突出。前方にいる袁紹軍と共に闘中なり」

はあ…袁紹軍に無礼働いていなきやいいけど…

「そつか。あともう一つ。俺らに近づいている軍勢は誰だ？」

「劉備とかいう義勇兵の一団なり。今は公孫贊の元に身をおいているといいます」

「あん？劉備イー？」りやまたたいそうな英雄がきたねえ

「わかつた。引き続き天の御使いの監視を頼む」

「ア解…」

「遊星…！」

「おひ、おかえり氷里。初めての戦場大丈夫だつたか？」

「大丈夫なわけないよ。怖かつた……でも綾が敵将を相手してくれて、私も副将討ち取つたから、結構あつさり勝てたよ」

「副将討ち取つたのかー…よくやつたな氷里。えらいぞ」

ナデナデ

「いやわわ～」

「遊星様。ただいま戻りました…」

「おかえり綾。また廖化が相手だつたか WWW」

「はい…また討ち取れなかつた…」

「廖化」」ときにそんな疲れるか？」

「綾つてば、廖化に告白されたんですよ」

「おい、氷里！」

「ああ？告白？まさか…」

「そんなわけないですよー断りましたー」

「そりだよな…あ、でも綾が本当に好きな男ができたら俺なんか気

「…するなよ？」

「むつ…遊星様は意地悪です」

「？」

「遊星さーん！」

「おひ、 麻里おかえりさん」

「遠田智総帥に敬礼！」

バツ！

徐庶隊は俺が総帥としてそれぞれ階級がある。

「つむ。」<sup>1</sup>苦労大尉。首尾を報告せよ

「ハツ…今日は初陣ですが、徐庶たんに群がる年増どもを肅正しました！」

「軍曹…敵の萌えブタどもに麻里は触られてないだろうな…」

「田に入れさせられしました…」

「上出来だ。少尉…あらゆる罵倒の限りを飛ばしました…」

「ハツ…年増の更年期障害を促進させてしましました…」

「」<sup>1</sup>苦労…お前たちは次の段階にすすむ価値があるよつだ

「あの…遊星さん？」

「気にするな麻里。男は悲しい生き物なんだぜ？」

「？？」

「練里、おいで」

「？何」

「お前が撃ち抜いた中に趙弘の副将がいた。だからナデナデ」

「~~~~つー／＼／＼

「頑張つたな…」

「ひるやこ…馬鹿」

その後、決着は曹操によつてつけられ、張角たちは死んだといつこになつた。でも俺は知つてゐる。

曹操と一刀によつて保護されたと百々田鬼が報告してくれた。ま、いいか。

「所でや、張角たちつて男？」

「おな（）なつ…（ふんつー）ゴフツー。」

殴つておいた

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7044y/>

---

真・恋姫†無双 OROCHI

2011年12月30日23時48分発行